

思想史における創造性とは

新たな知 *savoir* の創造は、往々にして従来 of 学知 *connaissance* への「批判 *critique*」として提出される。

たとえば、カントの『純粋理性批判 *Kritik der reinen Vernunft*』は、従来 of 形而上学の批判であり、マルクスの経済学に関する仕事は『経済学批判 *Kritik der Politischen Ökonomie*』から出発している。この両者が「批判」という語を用いていることは重要である。それは、彼らが従来 of 学知 of パラダイム批判を行ったことを意味するからだ。彼らが意図したのは、哲学や経済学 of 全体的な転換だった。

同様なことはニーチェの哲学について、また、ソシュールの言語学についても言い得る。ニーチェの哲学が従来 of 形而上学 of 全体的批判であったことはハイデガーがていねいに読み解いており、ニーチェ哲学はハイデガーを経由して、フーコー、ドゥルーズ、デリダに決定的と言ってよい影響を与えている。

ソシュールの言語学はタルドの経済学やデュルケームの社会学を吸収しながら、言語学 of 認識対象 *l'objet de connaissance* としての「言語 *la langue*」という概念を確立し、差異 *différence* という概念によってこれを規定した。

以上はよく知られている歴史上 of 事例であるが、従来 of 「知」 of 地平 (エピステメー) を対象化して批判する仕事であるという点で、これらの学知は、20世紀 of 知 of 台座を形成する重要な成分となっている。

それは、次世代に根源的な影響を与える学知は、その革新性を偶然に負うのではなく、みずからの革新性 of 自覚から出発するからだ。時代の転換をもたらすような知は、過去から現在にいたる知 of 総体を批判し、自己 of 歴史的な新しさを自覚する場所に立つ。始まりを始めるとは自覚的な開始 of 場所に立つことなのである。

自己は、今、歴史上 of どこに立っているのか、自己はいかに歴史的に創られているのか、そうしたことを客体化することから自己 of 創造性—自分が歴史に対して与え返すもの、歴史への反対贈与—が起動する。本当の意味での創造性とは歴史的な視野における自覚から産み出されるものなのだ。

われわれは、日本の17世紀 of 古典学者契沖 of 解釈学について論じようとしているわけであるが、な

ぜ、今、ここで、西欧における学問批判の話をしているのだろうか。

それは、契沖の解釈学が歴史的な自覚のなかで構築されていったことをわれわれがここで論じようとしているからなのである。

ヨーロッパ世界における解釈学の定礎者であるシュライアマハーの理論が翻訳学と解釈学の双方に通じていたことが示すように、翻訳は解釈の一形態であり、解釈もまた翻訳の一形態である。

したがって、解釈は、いったんテキストのもつ他郷性=不気味さ *étrangeté* に向き合い、今度はそれを自己の言語の内部に持ち帰って説明するという往復運動の形を取る。

解釈という行為は、他なるもの *étranger* と身近なもの *familier* の双方のあいだを行き来しながら創りあげられていく。

ところで、契沖は、『万葉集』の歌を理解するには、幼子の片言を母親が聴き取るように理解すべきものだと言っている。これは、彼の注釈書『万葉代匠記』の「惣釈」(=概説 *Introduciton*) に書かれている言葉であるが、原文は次の通りである。

此集ノ哥ハ神語ナト交テ上古ノ遺風アリ。大方ノ姿モ、詩ニ准ラヘハ、古詩ヨリ普采ノ比マテニ当ルベシ。此集ノ哥ヲ心得ムニハ、イトキナキ子ノ片言スルヲ、母ノ聞ナレテ意得ル如クスベシ。実ニハサルマシケレト、今ノ耳ニハ詞足ラスシテ片言ノヤウニ聞ユルカアルヲ、カクハ喩ヘテ云ナリ。此集ヲ見ハ、古ノ人ノ心ニ成テ〈今ノ心ヲ忘テ〉見ルヘシ》(ルビは西澤が現代仮名づかいで便宜的につけました。)(『契沖全集 第1巻』、1973年、岩波書店刊、p.161)

この文の解釈において重要なのは、契沖が「今ノ耳ニハ詞足ラスシテ片言ノヤウニ聞ユルカアル」、つまり、今の人の耳には言葉が足りず、まるで幼児の片言(不完全でたどたどしいものの言いかた)のように聞こえるものがある、と言っていることであろう。

これは、もちろん、『万葉集』の歌の表現が、それ自体で不完全でたどたどしいということを言わんとしたものではない。『万葉集』の時代から10世紀後の「今ノ耳」(=今の人の耳)にそう聞こえるという歴史的な懸隔を言っているのである。

なぜかというに、実際には、『万葉集』の表現は、幼児の片言どころか、中国の漢字で書かれたテキストを縦横無尽に引用しながら書かれた高度に知的な性格のものであり、また、『万葉集』自体、独自の詩学にもとづいて歌を選び、配列した書物なのである。『万葉集』は日本語を漢字だけで書くというきわめて知的に高い能力を要する作業によって組織されているということだ。

にもかかわらず契沖が『万葉集』の表現を「イトキナキ子ノ片言スル」(幼児の片言すること)、つまり、不完全で、たどたどしく聞こえるという比喻を用いるのは、古代の歌を「聴く」ことをいうためであろう。そのためには母親がわが子の言葉を聴き慣れていて、その言わんとすることを理解するのと同じようにしなければならない、という聴取のし方をしなければならないというのであって、契沖の解釈学の本質^{エッセンティア}があるわけだ。

2020年3月31日 研究代表者 西澤 一光